刪定家道訓 下

特35-618
1200800187554
特35
618

東京圖書館
和書門
教訓類
函 89
三三 5
架
一
號
二
冊

始

刪定家道訓巻下

貝原益軒　原著
川島棋坪　校訂

一古諺に曰く。萬事寛ふ從へい。其福自ら厚し。寛といい忙あらい急ならす。心廣く體胖ふして。人の過を宥すを云ふ。斯の如き人は福厚し。急ふして且忙しきい福少し。

一家に居ても。國に在りても。善を行ひ道に從ふの樂ふ如く者あし。初より勤め習ひて善を行ふへ。久しく行ひて慣るれは。未さ賢哲ふ至

らさるも。善を行ふこと自ら樂しきに至る。又文藝を學ふも難事なり。故ふ初い樂しからされとも。久しく習熟をれい。後ふい佳境ふ入るを得。況や善道を行ひて。熟するに於てをや。

一己を愚なれい。人を恨み易し。史記に曰く。智ある者い。輕しく人を恨みをと。知言ある哉。智ある人は。人の我か心ふ適せさること有らい左もつるへしと思ひて。人を咎めに。或い人の善道に背けるい。天資の愚なりと思ひて之を恕す。又人の生質偏ならい。其行ひ正しからに。智者い其偏ふる病の憐むへきことを知りて。怒らす。家の主たる人い。此心得つるへし。親戚家人の我か心に適せさるを怒りて。堪忍せされい。家道和睦せす。

一人に五計あり。一生の間。時に隨ひて之を營むへし。先つ幼時い。專ら父母の養に因りて成立せり。故に父母の訓ふ背くへからに。是を生計と云ふ。二十歳い。身を修め文藝を習ひ。家業を勉めて。身を立つる計を爲すへし。是を身計と云ふ。三十歳ふ至りてい。事を營み

て。家を保つの計を爲すへし。是を家計と云ふ。五十歳ふして。子孫の爲ふ計ろへし。子孫い年少く。世事に慣れす。故ふ父さる者。之か爲ふ計るへし。是を老計と云ふ。六十歳より以上い。我か死後の事を計るへし。早く死後の事を計らされい。死ふ臨みて。悔あとも及ふことなし。凡そ此五計い。朱信仲の語あり。人たる者。此年ふ應して。計を爲さ〳〵れい。怠る者と謂ふへし。

一園中の艸木を愛とるも。亦心を養ふの一助なり。暇あるときい。心を用ゐて。求め易き物を買ふへし。得難き物を得んと欲し。猥りふ人ふ請求し。多く財を費し。種類の多きと。花葉の勝れさるとふ誇り。之を鬪いしむるか如きい事多く心煩い〳〵。是樂にい非を。苦を求むるなり。

一園中の艸木は。珍異なるを好むへからす。又奇瑰ある木を植うへからす。只廣敞ふる園ふい。花果冬青樹等を植多。以て四時の推し移るを觀るへし。又藥艸を交へて。其名を知り其花を玩ふへし。都て植物い。密あらす疎あらさるを主とす。甚疎ふれい養氣之しく。甚密あれい。陰

氣深し。故ふ各其中を執るへし。

一花果を移し植うるい。活き易しと雖初植うるふ。地を擇ひ。去離を量り。後日移植の勞なからしむへし。艸も木も。屢移し植うるは。事多くして費多し。猥りふ植うるい。後ふ碩茂して所を得を所を得すして。屢他所ふ移せい。多くい枯る。枯れさるも。悴けて榮えす。故ふ已むを得さるに非されは。移すへからす。所を得せしめんとして。事を好むへからす。然れとも若初小木を植ゑて。碩茂せさるときい。之を移さへし。小木い。之を移して。活き易けれいなり。

一初めて宅を移さは。先つ果木を植ゑ。次に他樹ふ及ふへし。十年の計い。木を植うるに在り。木を植うるふい。果を先とし。花之に次き。冬青樹又之に次く。果い尤人ヨ益あり。就中。多く橘。柑。柚を植うへし。登りて熟したるい。金丸纍々として。花よりも美なり。柿。梨。栗。椒。石榴等い。皆良種を求め植うへし。花い梅を先とす。紅梅も可なり。櫻も亦可なり。椿花い久きふ耐へて。葉も亦美なり。海棠。薔薇。躑躅杜鵑花もよし。冬青樹

い。杉。檜。樅。金松。羅漢松等を宜しとす。竹を北方に植ゑて。火と風とを防き。又伐りて時用ふ備ふへし。庭前にい。柳。櫻。松。栢等を植うへし。又菜い。日用の助となる。園中ふ植うるは。斬新にして市ふ買ふふ勝まり。殊に其葉美いしく。人の目を悦い志むるい。却て花卉よりも勝れり。

一萬の事皆法あり。法に從へい。其道立ちて其事成る。法を守らすして。只我か心に任せは。其事必破る。家を治むるに尤法あり。法かけれい。財用盡きて。家を保ち難し。

一家を治むるに。財を用うるの法を知りて。之を守るを要とし。守ると守らさるとは。盛衰存亡の係る所なれい。常に心を用ゐて。之を守るへし。法を知らす。其心を用ゐされい。必貧窮に至る。貧窮なれは。啻に自ら苦むのみならす。親を養ふこと薄く。君に事ふること難く。人に施すへからす。禮義を行ふへからす。不虞の變ふ會へは。如何ともすへからす。貧窮の患。子孫ふ至りて猶止まさるなり。

一家を保つの道い。勤と儉とに在り。四民ともふ

之を勤むれい。其家皆治むへし。是財を得るの本あり。勤儉あれい。財を失いきして。克く家を保つへし。二の者併ひ行いきて。一を欠くへからず。益勤儉の工夫い。忍に在り。忍い耐めるなり。勞苦に耐へて。克く勤め。私慾を制して。儉約を行ふなり。

一家を治むるに。勤めて怠らに。財を用ゐるに。奢らず吝あらさるへし。勤と儉とい。家を治むるの要道なり。此二者並ひ行いるれい。貧窮ふ至らに。財用に乏しからす。之を行ふふ。心を小にして疎ならさるを善とに。是勤儉を行ふの心法なり。

一衣食住の三の者は。我り分より輕くするを善とも。身上ふ適當せりと思ふい。分に過きさるなり。只親を養ふい。本に報するの道なれい。我か分を忘れて。財を惜むへからに。又禮義を行ひ。人を救助さることい。分ふ從ひ力を盡さへし。是人を恤み。人ふ交るの道ふれいなり。

一士い。君に受くる祿あり。農工商い。父に得さる家財田產なり。四民皆其分内にて。儉約を行ひ。

家人を養ふへし。是君父に受けさるのみあらに。天より受くる所の定分なり。貴賤となく。貧富となく。其家の財産を用ゐて。事足るへし。是天命に安んして。其他を願はさるなり。已むを得さるに非されは。他人の財を借るへからす。事其分限ふ過くるなり。故に財足らすして。之を借るふ至る。是用財の法なくして。天命に安んせさるなり。能く財を用うる人は。財産の多少に由らに。其家ふ得さる所の分内にて。事足りぬ。家の困窮すると否さるとは。家産の多少ふ由らに。只我か心の儉ふると。奢れるとに因れり。故ふ約を以て。之を失さる者は鮮しと。聖人の言へること。なり。是家を保つの法なり。

一財を用うるの道。小を積みて大ふ至る。故ふ少費をも惜むへし。然れとも。若已むを得さるは。少しく費すも。大ふる害なし。一時ふ大財を用ゐんと欲せは。必猶豫して善く計るへし。已むを得は。忍ひて費をへからに。小費を積みて百ふ至るも。鉅費の一を償ふふ足らに。慎むへし。一家を治め財を用うるふ事毎ふ心を用ゐ。約に

して。疎略なるへからす。侈なるに吝あるに。過不及あかるへし。用ゐ過くるい侈れるなり。及いさるは。吝あるなり。心を用うること。疎なれい。財を用うること過不及多し。或い侈り或い吝にして。與ふへきふ與へを。與ふへからさるに與へ。多くをへき者ふ少くして。少かるへき者に多くをるい。事背き理悖りて。是心を用ゐさるなり。用ゐて精しからさるなり。

一禄位い。容易く得へからさる者あり。然をとも。得るの難きよりい。保ちて失いさること尤難

し。禄位を得るい。幸ふしてあり。禄位を保ちて失いさるい。德あけきい成り難し。幸ふして得るを雖。德なくして失ふ者多し。故に禄位ある者い。德行を慎みて。之を失ふことなかるへし。

又禄位を貧り。富を子孫に貽さんより。家法を正くして。教を子孫に貽をに如かを。假令禄位を貽すも。子孫道なくして之を失ふ者。古より皆然り。故に禄位を保ちて失いに。子孫長久ならんことを願り。只仁心を以て。人を恤み善を行ふを樂とし。尤子孫に善を勸むへし。是

目前の福なきも。終に天の惠を受くへし。是萬金を捨て。神佛ふ諂ふ百倍せる祈禱なり。是我か私言にあらす古賢の遺訓なり。

一禮記の王制に曰く。凡財用を制するふ。入るを計りて。出をことを爲すと。其意い今年得る所の財を計りて。其豐凶ふ因りて。來年消費する分限を定めて。之を節をへし。是を入るを計りて。出をことを為をゝ云ふ。得る所の分量より。少なく用うるい可なり。過くをい。足らすして困窮を。故ふ費を省きて。侈を戒め。多く餘財を貯へ。凶年。盜火。疾病。死亡等ふ備ふへし。是萬世用財の良法なり。

一又曰く。三年耕して。必一年の食ありと。其意ハ。農の三年耕せは。必一年の餘計ありを云ふなり譬へい四町の田を耕せは。三町の入を以て。生計ふ充て。一町の入を剩し。三年を過くをい。三町の餘計ありり。故ふ水。旱。風。蝗ふ遇ひて。五穀登らさるも。飢饉の患なく。財用乏しからす。是古人用財の法なり。後世之ふ遵へい。必財豐ふして。貧窮の患なし。

一世間の勢い萬事華美に赴きて奢費年に多きふ至る。故ふ倹約を旨とせされい。遂ふ困窮して。家を保ち難し。俗ふ流る時ふ移れい。倹約の道立たをして。必家を破るに至る。家の主たる者。早く計り遠く慮るへし。初憂患をもい。後必安樂あり。初安樂なれい。後必憂患多し。慮らさるへけんや。

一財を用うるに工拙あり。譬へい茲に兄弟あり。乃父より受くる。家財同しけれい。家の貧富も亦同しかるへし。然るに一人い富み。一人い貧くして。常に債を負ひて日を送り。利に利を加へて。財を損し。後にい借れる物をも償ふこと能いを。遂に貧困に至る者い。他なし。用財の工拙ふ因るあり。工とい後を慮りて。今を慎むあり。拙とい之ふ反をるなり。

一多く財を集めて。人に施さ〻るをい。必後の災となる。老子も多く聚むれい。必厚く失ふ中云へり。故に財多く聚まれい。貧苦なる人に施をへし。多く聚めて施さに。永く子孫に傳へんとするも。水火。盗賊。不慮の變に遇ひ。或い子孫の不

徳ふよりて。財を失ふこと。古今其例少ふからい。鹿臺の財。鉅橋の粟も。奢きい遂ふ保ち難し。鄧通か銅山の財。石崇か金谷の富も。不徳ふれい。終ふ盡くるに歸さ。又官禄を貪り。財寶を聚めて。子孫に貽さも。善を積まされい。餘慶ふることなし。況や子孫不肖ふるに於てをや。

一家ふ餘財あらい。益ふる事に使用さへし。無益を營みて。財を費さいい徒事なり。君子の猥りふ財を用ゐさるい。人に益ふる事ふ用ゐんか為なり。譬へい百萬錢を費して。神佛に萬點の燈を獻せんよりい。十萬錢を出して。飢寒の者を一濟ふに如かい。百萬錢を出して。女子を嫁せしむる者ふれとも。十萬錢を出して。子孫を教ふる人少し。又一日千金を費して。無益の驕侈をふさも。百金を出して。飢寒ふる者を救ふ者少なきい。慨くべきふ非さや。

一我か身の養を薄くして。父母の俸養を厚くすへし。次ふ兄弟。親戚。朋友の貧窮なるを救ふへし。其他飢寒。艱苦する者あらい。之を助くるを以て樂とさへし。親戚の子女。嫁さへき時に至

まとも。貧窮ふして。力無き者あらい。資を助けて嫁せしむへし。凡餘財ある者い。此等の事に惜むことなく。我か力に應して施さへし。斯の如く善を行ひ。人を助くれい。豈其心ふ樂しからさらんや。道理を知らさる人い。多くの財を費し。無益の事を為して。義理ふ背くこと多し。多く財を費して。義理に背くい。愚の極なるを知るへし。

一富貴にして。多く財寶を貯ふるい。是天より我一人に厚くさるに非ず。多くの人を救い恵めんか爲めふ。我に授けし所なりと信し。則天命に順ひて。仁愛を施し。以て貧苦の人を恵み。善を行ふを以て樂とすへし。是天道に背かさるなり。能く此の如くあらい。富貴の實ありて。人生の至樂を受くへし。多く財を有ると雖。獨一家の俸養に供し。人ふ施さゝさい。目して守錢虜と稱す。富有の實あくして。貧賤の者と一般あり。

一財を用うるの道を知らすして。貧窮なれい。父母を養ふに薄く。人ふ與ふへきを與へい。人に

惠むへきを惠まさ。人の惠を受けて報せに。終ふい負債を償いす。廉耻の道絶ゆるふ至る。且官とありても。貧ふれい民ふ貪り。禮義に背き。心術ふ害あること。皆困窮より起る。困窮い。儉約ふらさるより起き。故に儉約い。家を治むるの要道ふり。

一人として財利を貪り。吝嗇にして。廉恥の心ふく。親戚。故舊を惠まに。飢餓を救いす。禮義を勤めに。或い與ふへき者に與へに。取るへからさる物を取り。人の財を借りて償いす。人として

此一事ふらい。百行皆缺くへし。人の善惡を見るも。皆我か身の鑑ふり。善を見てい之を學ひ。惡を見てい之を省みるへし。此の如くなれい。人の善惡。皆我か身の龜鑑と為る。人の惡を誹らすして。我か身を省みるへし。凡鰥寡。孤獨。貧窮ふして便なき者ふらい。我か分ふ從ひて救ふへし。然らされい。天道に背かん。天道に背きしい。其報遲しと雖。其禍遁さ難し。恐るへし慎むへし。

一易に曰く。天道い盈てるをかくと。古語に曰ふ。

多く藏むれい。厚く失ふと。益多く財を聚めて。人の貧苦を救いされい。盈つる者い必かけ。藏むる者い必失ふ。天の冥罰恐るへし。

一人の器物を借ることを好むへからす。須用ありとも。已むを得さるに非さは。不自由を忍ふへし。若已むを得さして。借ることあらい。大切ふ用うへし。用ゐ終らい速に返をへし。久く留めて。貸主に事を缺かしめ。使人を受けて返をへからい。若借るる物を損することならは。善く補ひて過を謝をへし。凡器物。書籍等。借りて返さゝる物ならやと時に自ら省み。若借れる物あらは。速に之を返すへし。是亦家を治むるの一端なり。

一商人い日に財を運らし。其利を得。以て活計を為す。若商人の物を買ひ。價を償ふこと遲けれい。其財滯りて利塞かるへし。假令後日ふ之を償ふも。其償いさる間い。日月に得へき利を失ひ。幾何か彼か損失となるへし。之を要さるに。物を買ふへき財なくい。不自由を忍ひて買はさるへし。凡借るる物を返さに。買へる物の價

を償いされい。財主の恨想ふへし。

一人の書を借らい。我か書を閲きて。先つ其書を讀み了りて之を返すへし。人の書を借りて。久しく留め置くい情なり。大冊なる書も。二日ふ。一冊い見るを得へし。中冊の書。五冊を借らい。五日に見るへし。十冊の書籍い。十日に見て之を返をへし。久しく留むへからい。早く之を返せい。人も亦貸をことを惜ます。是學者心を用うへき所なり。

一人の書を借らい。汚損をへからす。屋漏。煙煤。油膩。猫。鼠。盗。火等の防きを為をへし。借きる書い筐笥ふ置き。見る時に方りて。之を出をへし。若汚損せい。補ひて其過を謝し。之を返をへし。是亦百行の一あり。

一書を人ふ貸さい。我か用缺くることあり。是を以て自ら省み。借きる物い。速に返すへし。又人に借らは。人の用も亦缺くることあり。然るに互に之を貸をい。書ふきを相憐みてなり。故に人の書い。長く留むへからす。財多き人い。書を買ふことを惜むへからい。

一親戚朋友に對し財を遣り取りするに我を利する心あらい彼に快からさること多し故に取るかも遣るにも少しく我か財を損することを厭いされい事なくして我も人も互に快し我を利すへき道理なりとも少しき財を爭ひ人を咎めて其心を失ふへからす財を人に貸して其負債を責むるも全く我に損かからんとをきい事滞りて行い難し事滞らんよりい寧我か財を舍てゝ彼我の歡心を得るに如かさるなり

一人と交るに人の財を費さしむへからす人の費を厭いもして已に費あからんことを欲せは人の費を以て我か身の樂とするなり賤むへし凡此等の事い我か心術の害とする故よ萬事缺くることなきも財を遣り取りするふ廉直ならにして貪ること有らい人ふ厭いる者なり

一親戚故舊朋友の貧しき者我か財物を借らんとせは我か力に從ひて之を與ふへし之を與ふれい仁愛の道行いれて我り心よ快く彼も

亦我ゝ恩に感せん。凡借る者い貧しきを以て借る。借りて返せい。彌貧苦に至る。故に廉直の人に非れい。返さことと少なり。且初貸さゝるの恨い甚深し。特か親ゝき人にい。財を貸すへからす。成るへくい之を與ふへし。財を貸をい災を求むるなり。後にい互に恨み交り疎きに至る者多し。貧窮なる者い。借る財を償ふこと能わさ。初い返さんことを思へとも。時過くれい怠りて償ふことを欲せさ。我身の貧苦なるとき。人の惠を受けて後日に忘さる人い少なり。故に負債を償いさ。督責すれい。恨み憤りて交道疎ふるに至り。或い恨み深くして。仇讐と為る。借りて返さゝる者い。其心邪曲なり。故に親戚と雖。必背きて疎遠なるに至るへし。況や朋友に於てをや。是財を費して敵を求むるなり。慮らさるへけんや。

一己むことを得さして。財を親戚朋友に借さい。初より與ふるの心を以てさへし。人情大抵借さる時い之を悦へとも。時過くれい。其惠を忘

る。故ふ豫て與へける心得なれい。恨みもし。貸せる者い。必得んことを思ひて。督責をきとも。返さゝれい。怒りて交を絶つ。世ふ其人多し。借りて返さゝるい。世俗の習あり。忿るへからに。一人多くい。儉約の善あることを知らに。儉約を吝嗇と思ひ誤りて。之を誹笑をるは。世俗の習あり。世俗の誹を以て。真實と為し。之に雷同をるい愚あり。世俗の誹信をへからに。世俗の誹を恐ゞて。儉約を行いさるい。氣力なきあり。然きとも。儉約の道を知らに。但心鄙猥にして。財

を惜こ。與ふへき物を與へに。用うへき財を用ゐに。仁愛を失ひ。禮義に背くこと有り。故に人の和を失ふ。斯の如きい。儉約に非を。吝嗇あり。

一儉約い。人の美德なり。古より聖王明主い皆儉約を行へり。仁人君子も亦儉約あらさるい無し。俗人は。多く儉約を嫌ひて。鄙吝なりとに。儉約い我か身の俸養を薄くして。奢らさるを云ふ。是君子の美德あり。吝嗇とは。をしむともやぶさかとも訓を。財を惜みて。與ふへき人に與へを。用うへき事にも用ゐさるを云ふ。是小人

の惡德なり。

一君子い猥りに財を費さず。故に餘財ありて。人を救ひ。財を用うべきことに用う。小人い。平生奢りて財を費せども。人を惠むことを知らず。人の爲めあい。財を惜みて施さず。故に奢りて財を費す者い。必財を惜みて人を救ひ。人を惠まざるあり。

一父祖の讓りを受け。能く家業を勉め。儉約にして。財を費さゞれば。永く父祖の讓りを保ちて。子孫に傳ふることを得べし。是を孝と云ひ。良民と云ふ。若惰りて勉めず。田地を賣り。財寶を失ひ。家を破り産を傾けて。困窮に至る者あり。不孝の甚しき者あり。是を頑民と云ふ。

一管子か曰く。人惰にして侈るは貧しく。力めて儉なれい富むと。凡家の貧きい惰りて侈るに由れり。富めるい勤めて儉なるに由れり。能く此理を會得し。其家を保つい。勤儉の二を行ふに在り。

一財禄い限りあり。私欲い限りなし。限りあるの財を以て。限りなきの欲に任せば。必財盡て困

窮をべし。富める人も貧しき人も。儉約を主とし。嗜慾を抑へ。凡百の事。總て我が分より薄くするを程度とすべし。縱令困窮ふして。其憂に堪へざるも。能く貧を忍ひて習熟されば。苦みなし。凡事慣るゝと。慣れさるとに因りて。苦樂あり。

一堯の時に。八年の洪水あり。湯の時に。七年の旱ありて。野に青草なき。民飢へて。道に乞ふ人なき。豫て貯蓄あれば。庶人の家も。貯蓄あるべかりし。凡人家に貯蓄あれば。

俄に變に遇ひて。爲すべき樣なし。故に早く變に備るの計を爲すべし。

一後事を慮らざる人は。俸養に奢り。酒食を豊にし。家居を美にし。衣服を飾りて。費を惜まず。財盡れば。人に借ることを憂ひず。財を貸す人は。利息加はり。彌借りて彌不足し。遂に家を破るに至る。故に初より早く。慮りて。後の計を爲すべし。

一初め貧くして。後に富める人は。初貧しき時を忘れをして。奢らされば。永く其富を保ちて失

いに。初賤しく後に貴き人い。初賤しき時を忘きをして。驕らされい。永く其貴きを保つへし。一財をもちうるに。心を用うると。用ゐさるとに因りて。費の多少異同あり。能く心を用ゐて。無用の費を省くへし。疎かにして。多く用うへからす。譬へい養生の道い。物毎ふ少くするを善とす。酒食を少くし。色欲を少くし。言と怒とを少くするなり。財を用うるも亦然り。物毎に多く用ゐ過すへからに。然れとも費を惜むこと。嚴密ふ過くれい。我か心を苦め。人に害あり。嚴密ある中に。寛恕ある善とに。人を使ふも亦然り。日々少暇あき樵に使へい。人皆苦みて其所を得す。少し暇ある樣に使ふへし。

一宋の山谷の詩に曰く。深念煩鄰里。忍窮禁貸賒。其意い。人の財を借り。人の物を賒りて。返さきい。人の煩ひとなるを思ひ。身の艱難を忍ひて。人の財を借らす。人の物を賒らさるを謂ふなり。家を治むるの道も。亦斯の如くなし。財を貸しさる者。物を賣りたる者の心。思ひ計るへし。昔の人い。家貧しけれとも。艱難を忍ひて

人の財を借られ。故に今時の如く。貧しき者多からす。或い小禄の人も。財の貯ありて。不慮の變に備へ〳〵あり。今の人い。浪費して。家財不足もるい。後患を慮らさるか爲めあり。

一人心測り難し。士と雖。忠信なりけきい。其言ふこと信〳〵難し。殊に庶人い。慣習惡〳〵して。信義少〳〵我ゝ心の如く。信信らんと思ひ。油斷して人に交れい。多くい約を違へて。後悔もることとなり。殊に財を授受すること。初に詳かふして。疎ゝにもぐからん。小人い人を欺き。人の財を奪ふことを好む。其姦計に陷るぐからず。萬事初に慎まされい。終りふ悔あり。

一貧家に男子多けきい。豫て分業の計を爲すべし。貧家に女子生るきい。早く注意して。嫁時の裝奩を調ふる計を為もべし。女子生れし時に。杉萬株を殖ゑて。其長もる時鬻きて助とせし例あり。桐を多く植ゑて。女子の裝具を助ふる者。往々にして在り。後の事を計りて。俄に蹉つかさる謀を爲もへし。家貧くして。豫て用意ゑけきい。男女の婚嫁に臨み。能く其費用に備ふ

るを得んや。

一貧しき人い。貨財を以て禮とせず。老さる人い。筋力を以て禮と爲さず。富める人い。贈り物を以て。其誠を表さゝし。是人の禮道あり。父母。兄弟。親戚。朋友。或い恩を受けし人にい。贈り物を以て。其誠を表さゝし。古人貧しけきい。束脩を贈り。富めるい玉帛を以てせ。各〻ある人い。財を惜みて禮なし。贈るへき人に贈らさるい。各嗇にして無禮なり。又小人に多く與へて。久しく與へされい。惠みを忘れて惰るなり。言を以て〻物を與へさるい。誠を盡すの道に在らず。軍中に於てい。言を以てして。祿を與へされい。士卒我の用を爲さず。然れとも。財祿を與ふるにも法あり。猥りに與ふれい。千金を與へて。人悦いを。又一言の情も。千金に勝ることあり。

一儉約にして。我〻身に侈りなき。之を德と云ふ。人に對して財を惜み。人に薄くして。禮に當らさるい。人皆之を賤む。即不德にして。各嗇あり。儉約を各嗇とする者あり。又儉約に托して。各嗇あるもあり。是皆不德あり。

一廣き家に居りてい。昔の穴ふ栖み。野に居りし時と。今の貧しき人の。茅屋に在るを思ふべし。穀肉を食してい。昔の人の木實。草根を食とせしと。今の飢餓に苦めゐる人とを思ひ出さゝし。絹を着て暖あらい。古の弁服の民と。今の衣ふく褐なくして凍へる者とを憫むへし。我の召し使ふ奴婢あらは。貧しき人の水汲み。自ら炊くの苦を察すへし。此の如くならい。樂多くして。分外の望み興らさるへし。

一凡家を保つの道い。儉約を行ふふ在り。儉約とい。侈りと費となきあり。侈りとい何そや。分外の事を行ふを云ふ。費とい何そや。無用の財を用うるを云ふ。又家を保つにい。豫て準備をるを先とすへし。豫て準備をるとい。早く後の事を慮りて。用心をるを云ふ。豫て計ることなくしてい。行當りて。如何ともすへからに。遠き慮りあけきい。必近き憂行り。聖人の言。良に以へるる哉。

一一家の生業を勤めて。財を生をるを本とし。儉約を行ひて。財を保つを道とす。之に反して業

を怠り。儉約を守らざるゝ。是困窮に至るの道なり。故に家を豐にし。財を足すの道ゝ。克く職業を勤むるに在り。又財を保ちて失いさるの道ゝ。儉約を行ふに在り。故に利養を得るゝ。貪らさるとも。自ら生業經營の中ふ在り。家財祿利多し〳〵と雖。限りある物あれゝ。儉あらさるゝ終は盡く。故に我が家ふ在る所の財を省て之を用うべし。家財の有無を量らすして。濫用するゝ。困窮の基あり。

一家を治むるゝ。國を治むるに同し。其要ゝ。財を用うるとの二に在り。財ゝ限りあれゝ。富貴の人と雖。儉約あらされゝ。終に盡くるに歸す。財を司らしむるに。實直ふる人を撰ふへし。其人黠なれゝ私利を營み。遂に主家を倒すに至る。故に財を用うると。人を用うるとの二事は。家を治むるの要務あり。心を用ゐさるへけんや。

一凡人の貧ふる者ゝ。天の禍に非す。多くゝ自ら速くなり。大抵後患を慮らすして。堪忍の心ふく。口腹耳目の欲を恣にして。分限より奢り。好

みて人の財を借りて。患とせば。物の價を償い
を。之を責むれい。怒りて與へを。家の破損を修
めを。器物の損失を省みを。夜い臥さへき時ふ
臥さす。朝い起くへき時に起きば。財の出入を
記さば。財の多少を計らば。家事を奴僕に任せ
て。撿をることを知らす。日夜出遊して。放逸無
賴の徒に交り。傲遊を事とし。酒色に荒み遊藝
を好み。多く無用の長物を集め。飲食の華美を
極め。不急の營作を好む。此の如きい。則禍を好
むなり。禍を好むい。則困窮を好むなり。是ふ因

りて困窮するい。天の禍に在らさるあり。
一人家の富める。天の福に由らす。其主人の行に
由れり。先つ家を治むるに。萬の事恣ならば。自
ら家事を勤めて。奴婢に先ち。家財の多少有無
を計り。朝い早く起き。夜い遅く寐ね。起臥其時
を失はば。酒食を貪らす。物の價を滯らしめす。
我か分内にて事を足し。人の財を借ることを
須ゐを。若己むを得をして。人の財を借らい。速
み還して約を違へを。衣食器物の美を好まば。
事心に愜はさることたりと雖。輕易に之を改

め作らず。營作を好まず。無用の長物を好まず。無益の遊藝を好まず。凡好むこと少きゝ故に。財を費ぬこと無し。是則禍を好まざるなり。福を好まざるゝ。福の來る所以にして。福の天ふ因らざる所以なり。

一家を保つと。保さざるとゝ。必しも夫の良否に因らず。多くゝ妻の賢否に由れり。古人曰ふ。家貧しけれゝ。良妻を思ふと。信ある哉。夫ゝ外を治め。妻ゝ内を治むるの職分あり。夫能く勤儉あれども。妻放肆に流れ。驕りて儉約あらざゝ

ゝ。家を保ち難し。故に人家ゝ。妻の賢否に由りて。盛衰する者なり。夫ゝ常に内ふ居らずして。妻の爲す所を知らぬ。故に妻不德あるゝ。財を失ひて家を破るに至る。妻の德ゝ慎みて驕らず。夫と舅姑とふ承順して。專ら心を家事に用ゐ。女工を勤め。中饋を主とりて惰らざる。是婦人の德あり。此の如くふして。始めて克く家を保つへし。夫たる者。亦愛に溺れて。婦道を誤らしむること勿れ。

一儉約を行ひて。家を保つこと。必早く慮らざる

へかゝらず。窮して後に倹約を行ふゝ。益少し。譬へゝ少き時より。心を養生に用ゐず。口腹耳目の慾を恣にし。晩年に至りて。漸く養生を慎まんとするか如し。慎まさるに勝れりと雖。衰へて後ゝ。其益少けれいなり。

一財を用ゐるに。人々身上に相應の分量あり。是を節と云ふ。節と云ふ過不及あきなり。節に過くれゝ奢と為り。節に及ゝされゝ吝嗇と為る。節を守るゝ中庸の道あり。

一費を省き奢を抑へ。家財の分限に應して用ゝへし。奢りを抑へて。私慾を制するゝ。務めて力を用ゐさるゝ成り難し。心勇あらされゝ。欲に誘ゝれ。世俗の誹を恐れて。動されゝ倹約を破る。故に力を用ゐて之を遂くへし。欲に誘ゝれ。誹を恐るゝ。氣力あり。と云ふへし。欲に克つに剛を以てし。恐れさるゝ。勇者の事あり。

一倹約にして。財を費さゝるゝ。尤家道に貴ふ所なり。然るとも。倹約を行ふふ托して。財を惜み。義を缺き。仁愛を施さゝるゝ。吝嗇あり。不德あり。禮義を務めて。仁愛を施し。己ゝ倹約にして。

人を恤むふ財を惜まされい。吉祥善事なり。己い奢りて人を恤まさるい。吝嗇あり。不徳あり。古人言へり。財を惜みていい善を行ひ難しと。又財を無益の事に費して。惜まさる人へり。愚の至りと謂ふへし。財を無益の事に用うるい。淵に捨つるに同し。是善を行ひ。人を恤むの道を知らされいあり。

一凡一年衣食の費い。甚多かるに。奴婢い我か勞に代るの外い用あし。器物い日用の外い用あし。是を備ふる費多かるに。然きい財禄へる人。

皆倹約を行へ。身を俸をるに餘りへるへし。足らすして人に請借するに至らに。然るに多く財用を費し。自ら困窮に至り。己を苦め。子孫に至るまて。困窮せしむるい。哀むへきことあらに。や。是用財の道を知らさきいなり。

一古の賢王い。時々民の貢租を免し。民の乏きを救ふと雖。穀い紅腐して食ふへかるに。錢い貫朽して用うへかるさるに至る。今士庶人の家も。倹約あれい。財餘りへりて足らさるの憂あし。然きい人の貧窮あると。富有あるとい。皆財

を用うるに法あると。否さるとふ因れり。之を用うること善あれい。貧あるも富に至り。之を用うること惡しけれい。富めるも貧に至る。心を用ゐさるへけんや。

一借の一字い。家を破るの基あれい。不借の二字を恪守きへし。人皆其分限の内ふ於て。財を用うへし。乏しきを忍ひて。人に借るへからに。分限の外に超過せは。必財足らすして。人に借るふ至る。人に借きい。年に利を出し。利に利を加へ。後ふい負債重りて。必家産を破る。借りて利

を與ふるい。是人に我か財を奪いるゝなり。惜むへきあり。故に家を保つの道い。財を分限の外ふ費さすして。分限内に足らしむへし。極めて貧困にして。自由あらさるも。力を出して經營せい。吾分内にて用足るへし。故に家を保つの道い。借ることを禁すへし。始少しく借るも。終に多く借る。借ることを屢あれい。後必家を破るふ至る。若已むを得にして。人に借らい。一家の俸養を薄くし。財を餘して速に償ふへし。約せし期を違ふへからす。期に違ふい。君子の恥

つる所あり。

一家を保つの道。富貴の人も心を用ゐ。瑣細の事に至るまで。約を行ふへし。昔い諸侯大夫も。自ら家事を勉め。瑣細の事と雖。心を用ゐ疎ふ〳〵らん。故に貧困に至らさるのみならん。庫に餘財あり〳〵あり。今の人い大家に非らさるも。家事を抛ち。家財を計らす。出入皆奴僕に任せて。自ら為さす。故ふ家計疎ふして。分外の費多し。況て奴僕に掠め取らる〳〵多きをや。此の如くにして。貧窮に苦み。我〻家計ふ疎ふるを知らを。只世の遭逢惡きを尤め。我〻不幸を嗚らす〳〵誤りなり。我〻身困窮に苦むのみならん。以て他人を妨け。遂に災を子孫に及ほん。哀まさるへけんや。

一人貧窮の時。勉めて艱苦を守るへし。今の人多くい家を保つに法ふく。儉約の道を知らす〳〵て。貧窮を耐ふること能いす。目前の欲に任せ。後日の災を計らん。分に過きて稱貸を。故ふ財益足らん。古の人い。我か身を儉約にし。能く不自由ふ耐へ。人の財を借ることを恥つ。若已む

を得をして人に借るは。大ふ之を恥つ。今の人い財を借ることを好み。此を以て恥とせず。世習ひて風を為せり。故に能く人情世變を鑑みて。儉を行いさゝへけんや。

刑定家道訓巻下　終

明治十三年一月十七日版權届
同　二月五日出版
同　十六年四月十七日再版届

埼玉縣藏版

定價二十錢

發兌
書林

東京府平民
石川治兵衛
東京日本橋區
馬喰町貳丁目壹番地

終